

自分の思いや意図を音で表現することができる力の育成 ～聴く活動から感受し、表現する授業をとおして～

小林 美佳

1. テーマ設定の理由

現行の学習指導要領では、言語活動の充実が求められている。音楽科では、聴いたり歌ったりする活動よりも、話し合ったりワークシートに記入したりする時間が増え、音のない音楽の授業が展開されることが多くなった。確かに言語活動は重要であるが、音楽活動において音のない授業、音で表現しない授業はのぞましいとは言えない。生徒は曲を聴き、歌い、創作し楽器を演奏することで表現活動を行っている。言葉で表現する活動はその一助にすぎず、表現活動における補足的な役割だと考える。歌唱表現の工夫を発表し、「今回の工夫点はこの部分です」と伝えたり、お互いの演奏を聴いて「ここがよかった、もっとこうしたらよい」と評価したりすることは重要な言語活動である。

しかし、音楽科で求められているのは自分のもつ思いや意図を、「音楽をつかって」表現することができる力である。そこで本研究では、生徒がもつ思いや意図を、音で表現することのできる力を育成していきたいと考えている。それは歌唱であったり、器楽であったりさまざまな形態が考えられるが、自分自身の力で表現できるようになって、初めて心から音楽を楽しめるようになると思う。そして、生涯に渡って音楽に親しんでいく生徒を育てていきたい。

2. 思いや意図を表現すること

音楽科における思いや意図とは、学習活動を進めていく中で生まれる「こんな作品をつくりたい」「こんなふうに表現したい」「感じ取ったことを伝えたい」などといった考えである。主に音楽表現の創意工夫の観点で評価され、思考・判断に大きく関わっている。

音楽活動を行う中で、思いや意図をもつことは必要不可欠である。授業に関わらず、普段生徒が接しているさまざまな音楽活動でも、思いや意図がなければ表現することはできない。吹奏楽で楽器を吹くときに「この旋律をやわらかく演奏したい」と考えること、合唱で「ソプラノが一番大きく聞こえるようにバランスを考えて歌いたい」と考えることなどである。しかし、思いや意図をもつためには生徒が「やってみよう」「自分にもできそう」と思えるような題材設定が必要である。ただ与えられて、やらされる課題には思いや意図は生まれにくい。適切な題材を提示し、生徒が自ら進んで挑戦しようとし、それを表現したいと思えて初めて、音楽活動が展開される。本研究では、生徒がもつ思いや意図を、生徒自身の力で表現できる力を育成することを目的として、授業を展開していく。

3. 「聴く活動」の重要性

思いや意図を表現する力の育成に必要なことは何であろうか。本研究では、さまざまな場面での聴取活動、つまり「聴く活動」を重要視していきたい。「聴く活動」というと、まず思い浮かべるのが鑑賞領域での活動である。生徒は中学校の3年間で多くの作曲家の作品を鑑賞し、仕組みを学び、感じ取ったことを言葉で表現する。単に「きれいだった」と表現するのではなく、「ヴァイオリンの響きが豊かに聴こえてきれいだった」「強弱の表現がはっきりしていて迫力があつた」など具体的な音楽の要素をもとにして、自分の考えを表現することが望まれる。

鑑賞活動に限らず、音楽の授業では「聴く活動」を行う場面が生徒の思考を促し、音楽表現の工夫につながるが多々見られる。例えば歌唱では、表現の工夫を考えるために、生徒は強弱や速度などの要素をもとにして試行錯誤する。そこに、生徒が思いもよらないような聴取教材を聴かせることで、「こんな表現もあるのか」と新たな発見をし、さらによりよい表現をもとめて工夫するようになる。創作では、身近な楽曲を聴いたり、ほかの生徒の作品を聴いたりすることで、自分にもできるかもしれないと思えたり、自分の作品を見直したりすることができる。「聴く活動」を効果的に仕組むことで、生徒の思いや意図は深まり、音楽活動はさらに充実すると考えられる。

また、それを表現するための力も「聴く活動」とおして育成できると考える。さまざまな表現方法を聴き取ることで、表現の幅が広がるからである。お互いの演奏を聴き合うことも重要で、視覚的にも表現することの多様性を知ることができる。生徒が多くの表現方法を学び、それを自分の力で試し、実際に自分の思いや意図を表現することを目指していきたい。しかし、聴くだけで表現の技能が高まるわけではない。技術面の指導はこれまで同様、教師が主導し、全体に指導していくことも忘れてはならない。

4. 全体研究との関わり

全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行う。音楽科の授業の中で、生徒が「深く考えている」と言える場面は多い。例えば、歌唱教材において「どのような表現をすれば、よりよい歌になるだろうか」、鑑賞教材において「作曲者はどんな意図をもってこの曲をつくったのだろうか」などと考えるときである。

音楽活動では、まず聴いたり歌ったりして「感受する」こと、そしてそれをもとに自分の思いや意図をもって「表現する」ことが重要となる。生徒は自分自身と向き合ったり、仲間と交流したりすることで、さまざまな表現の工夫などを試行錯誤する。このような試行錯誤の過程が「深く考える」ことと言える。それによって生徒一人一人の世界は大きく広がっていく。こんな考え方もあるのか、こんなふうを感じる人もいるのか、という素直な驚きや発見が、感性を豊かにし、生徒の音楽活動の可能性を無限に広げていく。ただし、広げるだけでは生徒に音楽を表現する力がついたとは言えない。何でも好きに表現すればよいのではなく、「この曲にふさわしい表現とは何か」「もっとよい工夫はないだろうか」とさらに考えることも「深く考える」ことだと言える。つまり、「深く考える」ことによって、「思考が広がる」場合と「思考がまとまる」場合があると考えられる。どちらも音楽活動を行う上では欠かせないことである。また、ただ心で考えているだけでは、音楽表現はできない。それをいかに伝えていくかが表現することの難しさでもあり、楽しさでもある。そのため、教師は生徒が「やってみたい」「自分にもできそうだ」と思えるような題材・教材を用意し、「楽しい」「できた」という経験を多く積ませることが必要となると考える。

また、全体研究では「深く考える」授業の手立てとして、「視点を変える」活動を取り入れている。音楽科では、聴取教材を用いて新たな表現方法に気付いたり、仲間と交流してお互いの表現の工夫を知ったりすることを、「視点を変える」活動と捉えている。グループ活動や合唱活動等をとおして、音楽科ではこれまでも授業の中で行ってきた活動である。全体研究と照らし合わせる中で、より効果的な方策について研究・実践していきたいと考えている。

5. これまでの研究のあゆみ

平成25年度まで音楽科は、『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む～音楽を形づくっている要素をもとに、表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成をとおして～』という主題のもと研究を行ってきた。

全体研究を受け、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考え実践を行った。これらの力を身に付けるためには、「どんな表現方法があるのだろうか」「この曲にはどんな工夫がされているのだろうか」などといった問いをもたせることが必要となる。そこで、生徒に感受させるもととなる聴取教材にこだわって、教材の工夫を行った。聴取教材は、比較的平易で親しみやすい旋律であること、多くのバリエーションがあることなどを条件とし、その時の題材にもっとも合うと思われるものを選曲した。

例えば、歌詞の内容から歌唱表現を工夫する授業では、生徒の予想に反するような表現の工夫をしている楽曲を選ぶことで、「どうしてこのような表現をしたのだろうか」「この表現をすることでどんな効果があるのだろうか」といった問いをもたせることにつながった。また、オブリガートの創作の授業では、もとの旋律にハーモニーをつけたもの、オブリガートをつけたものと変化していく楽曲を聴かせ、工夫を加えることで曲の雰囲気が大きく変わることを感じ取らせることができた。聴取教材の効果的な利用は、生徒が問いをもつきっかけとなり、その後の音楽活動に大きく影響することが実証できた。「どんな工夫がされているのか」を考えることで自分の作品を見直すことができ、聴取教材の工夫を真似したり、それを利用してさらに工夫を考えたりする姿が見られた。適切な教材によってきっかけをあたえることで、生徒の「やってみたい」「こんな作品にしたい」という意欲を向上させることにつながると考えられる。

また、効果的な聴取と同様に重要となるのが、教師の役割である。音楽科では、グループでの活動を取り入れることが多い。個人で考えたことを仲間と共有し、さらに高めていく過程が、音楽活動を深めるうえで効果的と考えられるからである。しかし、グループ活動を進めていくにあたり、教師がそれぞれのグループを巡回していると時間がかかりすぎ、生徒の活動が停滞してしまうという問題点もある。そこで、教師が適切な声かけを適切な時間に行うことが必要となる。巡回した中から授業のねらいに則した工夫を行っている生徒を取り出し、全体に経過を見せることで仲間の考えた工夫を知り、「自分はこうしたい」という意欲を高めていく。教師の声かけが生徒どうしの相互作用を促し、よりよい音楽活動を展開するきっかけとなると考えられる。

表現領域と鑑賞領域の関連を図ることは、生徒が音楽的な感受をもとに、思考・判断・表現する力を育てるうえで効果的な手だてだと言える。しかし、生徒が聴取教材から感受したことや、表現するために工夫したこと等を見とる

ことについては、課題が残った。ワークシートの工夫や録音機器の利用など、生徒の見とりに関する手立てを今後も考えていきたい。

6. 今年度の具体的な研究内容

今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、さらに研究を深めていきたいと考えている。

・題材設定

音楽科では、これまでも授業を作る際には、生徒が自ら「やってみたい」と思える題材設定にこだわってきた。前述したように、「深く考える授業」では題材設定がさらに重要になってくると考える。これまでも「オブリガート創作」や「CMソングづくり」「ICT機器を利用した授業」など、生徒が興味をもち、だれでも取り組める題材を設定してきた。今後もこれまで以上にこだわり、ねらいを明確にした題材の設定を行っていきたい。

・グループ活動

昨年度は、グループ活動をどのように展開するかが課題であった。大人数で活動すると音楽を得意とする生徒やリーダーの生徒が活躍し、全員の思いや意図を汲むことができないこともある。また、少人数でグループの数が増えると教師が巡視する時間が減り、十分な指導ができない。さまざまなグループ活動を実践して感じたのは、まずはその題材にあった人数設定が重要だということである。例えば合唱活動でグループをつくる場合には、各パートがバランスよく配置されている必要がある。以前に「時の旅人」の歌唱表現を工夫する授業を行ったときには、ソプラノ2人、アルト2人、男声4人の8人グループを編成した。自信のない生徒のいる男声パートなどは、ソプラノやアルトよりも人数を多くするなどの工夫をすることで、活動をスムーズに行うことができた。

また、創作では個人でつくった旋律を発表し合い、意見交換する場面が多いため、グループの人数は4人ほどの少人数が適当と思われる。7月に行った「チャイムのモチーフ」を変奏させる授業では、男女混合4人のグループをつくって活動させた。この授業では4時間計画の中に毎時間グループ活動を仕組んだ。(実践事例①参照)グループによる交流は、生徒の創作活動に良い刺激を与えることができる。しかし、個人でじっくりと創作する時間を確保するためには、グループ活動の時間を取るのが難しくなる。グループ活動を行っている時、予定していた時間より長くなることが多い。それぞれのグループで進度が違ったり、メンバーが意欲的で、次々に意見が出てきたりするためである。創作では、個人でじっくりと取り組む時間も必要である。ひとつの題材で授業できる時間数は限られているため、グループ活動を仕組む場合には個人活動とのバランスを考えなくてはならない。そのため、グループ活動以外の交流の方法についても模索していきたいと考えている。

7. 研究の実際（実践事例）

①第1回事前研究会授業【第2学年創作】

題材名「モチーフを変化させて、場面に合った旋律をつくろう」

指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
モチーフを「リズム・調・速度・拍子」の4つの音楽的観点で変化させ、印象の違いを感じ取る。	1時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・「チャイムのモチーフ」(A F G Cの4つの音)をつかって創作活動を知ることを知る。 ・モチーフのリズム・拍子等を変化させることで、聴いた印象が変化することを感じ取る。 ・4人グループを作り、実際にモチーフを変化させてさまざまな工夫を体験する。 ・iPadの使い方を知る。 	<p>関①音楽的観点の変化による印象の違いを理解し、意欲的に創作活動に取り組もうとしている。</p> <p>【観察、ワークシート】</p>	<p>☆リズムや拍子の変化で同じ旋律でも印象が変わることを感じ取り、さまざまな工夫を考えている。</p> <p>■わからない生徒には譜面に書いて説明し、実際にグループのメンバーと協力して挑戦させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 一斉 ・学習形態 グループ ・学習形態 グループ
個人で1つの場面につき、2小節（全部で8小節）の旋律づくりを行う。	2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで4つの場面を設定し、それをもとに、1つの場面につき2小節の旋律を個人で創作していく。ただし、拍子を変化させる場合には、2小節でなくともよい。（記譜はせず、キーボードや鍵盤ハーモニカで演奏しながら試行錯誤する。iPadのアプリに録音して記録する。） ・場面が移り変わるところ（2小節ごと）の最後の音には、必ずフ 	<p>技①モチーフを4つの音楽的観点で変化させ、場面に合った旋律をつくることができる。【観察、ワークシート】</p>	<p>☆場面にあった旋律をつくるために、モチーフをどのように変化すべきかを考えて試行錯誤している。</p> <p>■創作できない生徒には、キーボードで4つの音を確認し、場面の様子を考えながら創作するように支援する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・iPadで録音する

		エルマータをつけさせ、次の場面につなげやすくする。			
4人グループでお互いの旋律を聴きあい、意見交換しながら、よりよい作品に仕上げていく。	3時間目 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に創作した旋律を、4人グループで演奏し、聴きあう。 ・お互いの作品を批評し、より場面に合った作品にするために試行錯誤する。 ・個人活動に戻り、自分の旋律を完成させる。 	<p>創①場面に合った旋律をつくるために、どのような音楽的観点でモチーフを変化させるべきかについて、思いや意図をもっている。</p> <p>【観察・録音・付箋】</p>	<p>☆グループのメンバーと発表しあうことで、自らの意図した旋律になっているかを確認し、どうしても場面にあった旋律ができるかを試行錯誤している。</p> <p>■仕上げができない生徒には、グループのメンバーと協力し、一緒に音を出しながら工夫を考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態グループ ・学習形態個人
創作した旋律を発表し、お互いに感想を述べあう。	4時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で、完成した旋律を発表しあう。 ・代表1名の旋律を全体に発表する。(計10名) ・発表を受けて感じたことや、創作の感想をワークシートに記入する。 	<p>関②グループのメンバーの意見を聞いたたり、自分の意見を述べたりし、活動に意欲的である。【観察】</p>	<p>☆お互いの作品を歌いながら、感想を述べたり、よりよい表現について意見を述べたりしている。</p> <p>■活動ができない生徒には、グループのメンバーと一緒に歌唱させ、自分の作品と比べさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態グループ ・学習形態一斉

※斜体は「視点を変える」活動の場面

②中等教育研究会授業【第2学年創作】 学習指導案

1. 指導内容 A表現 (3) イ、〔共通事項〕(1) ア (旋律・構成・リズム・速度)

2. 題材名 物語をもとにして旋律をつくり、変奏させよう！

3. 題材設定の理由

本題材では、鍵盤ハーモニカの黒鍵5音を使って旋律を創作する活動を展開していく。2年生は、7月に旋律の基となる「モチーフ」を与え、それをさまざまな音楽的観点から変化させていく活動を体験した。与えられた「チャイムのモチーフ」はたった4つの音で成り立っているが、速度やリズム、調や拍子を変化させることでさまざまな表現の工夫ができる。自分が表現したいイメージに合わせて変奏することで、楽器演奏が苦手な生徒でも比較的簡単に創作に取り組むことができた。

それを受けて今回は、音をひとつ増やし黒鍵の5音とし、物語のイメージをもとに旋律を自由に創作する。そして、物語をおおまかに「はじめ」「なか」「おわり」の3つの場面に分け、自分の創作した旋律を2つの音楽的観点(リズム・拍子)を使って変奏していく。その後、速度の変化や白鍵の音、和音など新たな観点を取り入れ、さらにその場

面に合うよう工夫を加えていく。すでに生徒たちは前回の創作活動で、音楽的観点の変化による印象の違いを感じ取り、自分たちの作品に取り入れる経験をしている。今回は基本的には個人での創作とし、他者との交流の時間を取り入れることで、よりよい作品の完成を目指す。自分の思い描いたイメージが実際に音となり、さらにそれが物語を表現することにつながっていく楽しさを感じさせたい。そして前回の創作をもとに、さらに活動の幅を広げ、表現することへの意欲を高めていきたい。

前は記譜を一切行わず、録音のみで記録したが、今回は必要に応じて記譜も行う。物語のイメージを5つの音で表すときには、基本的に4分の4拍子・1小節に設定する。記譜に時間がかかり、創作活動に取り組めないことも想定し、録音での記録も可とするが、基本的には録音だけに頼らず、自分で再生可能なものにする。ワークシートにはリズムや音の高低などを簡単に書いておき、次の授業まで記憶しておけるように指導する。

鍵盤ハーモニカを使って、5つの音で創作することで、「自分が持っている身近な楽器で、どの生徒でも創作活動が楽しめる」よう工夫したい。創作は、経験を積むごとに楽しさが増していくと考えている。今回の題材をとおして、創作の楽しさを知り、既存の曲にも作者の思いや意図があふれていると感じさせていきたい。そして、今後合唱などの活動を行うときにも、それぞれの曲に込められた思いや意図を感じ取り、表現活動に親しんでいく生徒の育成を目指していきたい。

4. 全体研究との関わりについて

全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行う。

これを受けて音楽科では、「自分の思いや意図を音にする創作活動」を展開していく。これまでの授業を経て、生徒たちが「創作は難しいものだ」という考えを抱いていることを感じた。しかし、題材の設定を工夫し、生徒が「やってみようかな」「できそうだ」と思える活動を仕組むことで、生き生きと活動することができる。今回の題材でも音の数を限定したり、イメージしやすい物語を教材としたりするなどの工夫を行っている。創作は特別難しいものではなく、少しの工夫でさまざまな表現ができ、誰にでもできる活動であることを感じさせていきたい。

・「視点を変える」活動

本研究を進めるうえで重視する活動として挙げられているのが、「視点を変える」ことである。今回仕組んだ「視点を変える」活動は二点ある。

一点は他者との交流である。創作は個人で行うが、ある程度自分の作品ができたところで、自由に仲間との交流できるようにする。あえて決まった時間をとらず、自由にお互いの演奏を聴き合うことで、「そのような方法もあるのか」「こんな工夫をすると良いのか」など自分の考えを広げていくきっかけとしたい。そして、発表した旋律について仲間から批評してもらおう。良い点や改善点などの意見をもらうことで、新たな視点を発見し、よりよい作品に仕上げようとする意欲をもたせることにつなげたい。

もう一点は生徒同士の活動ではなく、新たな視点を教師から与えることである。以前の創作活動でも、生徒は与えられた音楽的観点だけでなく、自分で考えた工夫を自由に取り入れる姿が見られた。それは音楽経験が豊富で、さまざまな工夫を知っている生徒にとってはさほど難しいことではない。しかし、授業以外の音楽経験が少なく、普段自分で楽器などに触れる機会の少ない生徒にとっては、表現方法を思いつくことさえ難しいことだと言える。そこで今回は、和音や非和声音である白鍵の音を使うこと、強弱や速度による工夫もできることを教師から新たな視点として与えることとした。鍵盤ハーモニカやキーボードで強弱を表現することは難しいが、息の入れ方や音量の調整である程度表現できると考えた。また、和音等を入れることで黒鍵以外の音を使うこともでき、さらに豊かな旋律の創作が期待できる。

授業のまとめでは少人数グループを編成し、自分の作品を発表する。自己満足で終わるのではなく、聴いている人にも自分の思いや意図が伝わる創作・演奏を目指したい。そのためにも、「視点を変える」活動で試行錯誤を重ねることで、よりよい作品づくりにつなげていくことが重要だと考える。

5. 教材について

(1) 教材

- 【聴取教材】 ・黒鍵のみで演奏できる曲「上を向いて歩こう」「ゆかいな牧場」・CMソングなど
 【物語】 ・「スイミー」 レオ=レオニ作 / 谷川俊太郎訳（光村図書・小2国語上より）
 ・「おむすびころりん」 日本の民話（光村図書・小1国語上より）

(2) 教材選択の理由

黒鍵だけで演奏できる曲はいくつかあるが、生徒が知っていると思われる曲や、普段CMで使われている曲を聴取教材として設定した。授業の1時間目で紹介し、「黒鍵だけでもこんなに曲が作れるのか」という新鮮な驚きを与えたい。

今回創作のもととする物語は、小学校の国語の教科書から選択した。誰もが知っている内容で、それぞれがイメージをもちやすい。また、短い物語の中に印象的な場面がいくつもある。そのため、創作した旋律と合う場面を見つけやすいと考えた。同じ物語から、いくつもの旋律が生まれる面白さを味わってほしい。

6. 題材の目標

- ・物語を読んでイメージをもち、それを音で表現するために、自分の思いや意図をもって創作することができる。
- ・視点を変えて試行錯誤し、よりよい旋律づくりをすることができる。
- ・お互いの演奏を聴き、批評するなどして旋律をつくることができる。

7. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
① 物語から表現したいイメージをもち、意欲的に創作、表現活動に取り組もうとしている。 【観察】	① 自分が表現したい旋律をつくるために、どのような工夫を取り入れて変化させるべきかについて、思いや意図をもっている。 【観察・録音・ワークシート】 ② 新たに与えられた音楽的観点をを用いて、どの部分をどのように変化させたいかについて、思いや意図をもっている。 【観察・録音・ワークシート】	① 自分の思いや意図を表現するために適した音楽的観点をを使って旋律を変奏し、さまざまな印象をもつ旋律をつくることことができる。 【観察、録音・ワークシート】

8. 指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
物語のイメージを黒鍵の5つの音で旋律にし、「モチーフ」を作成する。	1時間目	・五音音階でつくられた曲を知る。 ・創作の内容を知る。(教師が例示する。) ・「おむすびころりん」「スイミー」のどちらかを選択する。 (物語をおおまかに	関①物語から表現したいイメージをもち、意欲的に創作、表現活動に取り組もうとしている。【観察】	☆自分がつくってみたい旋律のイメージをもち、意欲的に物語を選択し、創作活動に取り組んでいる。 ■創作できない生徒には、2つの物語の印象を聞き、どんな旋律にしたいのか考えさせる。5つ	・学習形態一斉

		<p>「はじめ」「なか」「おわり」の3つの場面に分けて提示する。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物語のイメージを鍵盤ハーモニカの黒鍵のみで表現する。（全体的なイメージでもよいし、物語のはじまりを表現してもよい。これが、1小節のモチーフとなる。） ・できた旋律を記録する。（記譜が苦手な生徒は、録音も可。教師が支援する。） 		<p>の音を実際に弾きながら試行錯誤させる。</p>	
<p>1時間目に創作した旋律を変奏し、物語の「なか」の部分を作成する。</p>	<p>2時間目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1時間目に創作したモチーフを2つの音楽的観点（リズム・拍子）で変奏する。 ・2つの観点を変化させることで、どのような違いがあるかを確認する。（教師が例示する。） ・1時間目につくったモチーフを「はじめ」とし、物語の「なか」「おわり」をイメージして変奏する。 ・「なか」の部分の変奏を作成し、自分の選択した物語の場面合うかを確認する。（「なか」の特にどの場面の様子かは個人で違ってよい。） 	<p>創①自分が表現したい旋律をつくるために、どのような工夫を取り入れて変化させるべきかについて、思いや意図をもっている。 【観察・録音・ワークシート】</p>	<p>☆自分で創作した旋律を3つの音楽的観点を使って自由に変奏させ、楽しんで活動している。</p> <p>■創作できない生徒には、キーボードで5つの音を確認し、場面の様子を考えながら創作するように支援する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・i P a dで録音する 	

<p>「なか」の部分 を、場面により 合った変奏に なるよう工夫 する。</p>	<p>3 時間目 (本時)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・速度の変化をつけた り、白鍵の音を入れた り、強弱を工夫した り、和音にしたりする ことで、表現の幅がふ くらむことを知る。 ・新たな音楽的観点を 取り入れて、よりよい 旋律になるよう変奏 する。(ただし、モチ ーフの原型が完全に 消えないようにす る。) ・適宜仲間と交流し、 出た意見をもとに、さ らに工夫を重ねる。 	<p>創②新たに与えられ た音楽的観点をを用い て、どの部分をどの ように変化させたい かについて、思いや 意図をもっている。 【観察・録音・ワーク シート】</p>	<p>☆発表しあうことで、自 らの意図した旋律になっ ているかを確認し、どう したら場面にあったより よい旋律になるかを試 行錯誤している。</p> <p>■仕上げができない生徒 には、一緒に音を出しな がら例を示して工夫を考 えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人・ペア ・学習形態 個人
<p>物語に合わせ た3つの旋律 を完成させ、発 表する。</p>	<p>4 時間目</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動をも とにして、「おわり」 の部分を作成する。 ・4人のグループを作 り、お互いの作品を発 表し合う。 (発表時には言葉で も、変奏の工夫を表現 できるようにする。) ・発表を聴き、感じた ことを伝え合う。 	<p>技①自分の思いや意 図を表現するために 適した音楽的観点を 使って旋律を変奏 し、さまざまな印象 をもつ旋律をつくる ことができる。 【観察・録音・ワーク シート】</p>	<p>☆これまでの活動をも とにして、「おわり」の部 分にふさわしい音楽的 観点をを用いて変装して いる。</p> <p>■活動ができない生徒に は、「なか」で用いた音楽 的観点を確認し、同じ手 順で創作させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・学習形態 グループ

9. 本時の授業について

- (1) 日時 平成27年10月3日(土) 10:00~10:50
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 第1音楽室
- (3) 本時の目標: 新たな音楽的観点を使い、「なか」の部分をもとに変奏する。

(4) 展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
<p>導入 (3分)</p>	<p>1. 本時の活動を知る。 ・前時までに、自分がどの段階まで できていたかを確認する。 ・前時につくった旋律をさらに工夫す ることを知る。</p>	<p>・本時では、前時までに変奏した旋律 を、物語に合うようにさらに工夫して いくことを伝える。</p>	
<p>展開 (4.5分)</p>	<p>2. さまざまな工夫による曲の印象の 変化を感じ取る。 ・経過音等の非和声音を入れた場合の、 印象の変化を感じ取る。(黒鍵以外の</p>	<p>・新たな音楽的観点をつかって変奏し た作品を教師が例示する。 ・工夫したことによる印象の変化を、 生徒に言葉で表現させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・iPad・ワー

	<p>音を入れてもよいこととする。)</p> <p>・速度の変化をつけたり、単音ではなく、和音を取り入れたり、強弱を工夫したりすることで、さらに幅広い表現ができることを感じ取る。</p> <p>3. 新たな音楽的観点をを用いて、「なか」の部分により場面に合ったものに変奏する。</p> <p>・適宜、仲間と交流し、お互いの演奏を聴き合う。</p> <p>・良い点や改善点をお互いに伝え合う。</p> <p>・なぜその工夫を取り入れたのか、自分の考えを伝えられるようにしておく。</p>	<p>・新たな音楽的観点を必ずひとつは用いて変奏させる。</p> <p>・「モチーフ」の原型がわからないような変奏をしないよう指導する。</p> <p>・交流するときは、改善すべきことも伝え合うよう指示する。</p> <p>・仲間からもらった意見はワークシートなどに記録するよう伝える。</p> <p>・できる生徒には記譜をさせるが、旋律の記録は録音も可。できる限り自分で記憶し、再生できるような旋律にさせる。</p>	<p>クシート</p> <p>・学習形態 一斉</p> <p>創②新たに与えられた音楽的観点をを用いて、どの部分をどのように変化させたいかについて、思いや意図をもって</p> <p>【観察・録音・ワークシート】</p> <p>・学習形態 個人</p>
<p>まとめ (2分)</p>	<p>5. 次回の学習について知る。</p>	<p>・今回は3つの旋律を完成させ、少人数グループでお互いの作品を発表し合うことを伝える。</p>	

※斜体は「視点を変える」活動の場面。

8. 今年度の研究のまとめ

(1)「深く考える」授業について

①音楽科としての「深く考える」授業

音楽科の授業は、決まった解答があり、それを導き出すというより、感性を刺激し、よりよいものを目指して表現の幅を広げるような内容が多く見られる。「もっと曲に合った表現方法はないか」「よりよい旋律にするにはどうしたらよいか」などと、今の自分にはないもの、足りないものを求めて試行錯誤していく生徒の姿が見られるよう意識している。試行錯誤する過程には必ず自分の思いや意図が関わっており、それを表現するための経験を、さまざまな題材をとおして積むことが大切であると考えてきた。全体研究でいう、「自分なりの結論」に満足せず、さらにその先を求めることは、音楽科ではこれまでも自然に行ってきたと言える。人それぞれ違う感性をもつからこそ、自分の思いや意図を伝えたいと考え、どうしたらよいか試行錯誤する。よりよい表現を追い求め、自分の感性を広げていく授業が音楽科における「深く考える」授業であると捉えている。そしてそれは、音楽科が目標とする「自分の思いや意図を表現することのできる力の育成」にもつながっていくと考えている。

②題材設定と授業のつながり

「深く考える」授業を行うにあたり、今年度も、生徒が「やってみたい、自分にもできる」と感じられるような題材を意図的に設定した。例えば創作の分野では、生徒の経験が少ない「変奏」に焦点を当てた。これまでの授業では、新しい旋律づくりを主に行ってきた。さらにそれを工夫することで、また違った曲ができあがる驚きや楽しさを感じてほしいと考え、授業を構成した。わずかに工夫するだけでも大きく変わる音楽に、素直な驚きの声をあげる生徒の姿をみることができた。

個人で試行錯誤していく



また、「物語をもとにして旋律をつくる」ことで、自分の思い描いた印象を音で表すという経験を積ませることができた。たった4拍の旋律がモチーフとなり、さまざまに変化することで、自分の思いや意図を表現することができる。自分の作品だけでなく、仲間の作品を聴くことで、音楽の表現が無限に広がっていくと考え、設定した。

また、創作を終えたあとの授業では、組曲『展覧会の絵』を鑑賞した。絵画をもとにつくられた色彩豊かな曲を聴き、その背景を知ること、より音楽を深く味わい、楽しむことができたのではないかと感じている。自分たちも物語をもとにして創作することができたことから、作曲家を身近に感じ、改めて曲に施された工夫や、すばらしさなどを感じることはできたのではないだろうか。生徒の感想の中には、「ムソルグスキーが、ガルトマンの絵を見て圧倒された様子が、曲の壮大さに表れていた」「きっとこの曲は、ムソルグスキーが親友に込めた尊敬や信頼の心を表現したかったのではないか」といった記述が見られた。そのほかにも、「私は、『スイミー』のモチーフをつくるだけでも苦労したが、ムソルグスキーは絵をもとにして、こんな曲を創ってしまうなんて本当にすごいと思う。」という記述も見られた。これは、自分が経験したからこそ実感できた感想であり、本実践の成果であると考えている。

このように「深く考える」授業を行うためには、適切な題材設定を行い、さらに他の分野にもつなげていくことが効果的であると考えている。

(2)「視点を変える」活動について

①グループ活動と個人活動のバランス

今年度は「深く考える」授業を実現させるための手立てとして、「視点を変える」活動を仕組んできた。音楽科の授業において、「視点を変える」活動として考えられることのひとつは、他者との交流である。これまでの研究内容を受けて、個人活動とグループ活動をバランスよく行うこと、グループ活動以外の交流活動についても検討することを目的に授業を組み立てた。グループ活動については前述したとおりであるが(6.今年度の研究について参照)、公開研究会の授業では個人活動を中心に行い、適宜グループ活動を取り入れることとした。具体的には、個人で創作活動を行う中で、仲間に途中経過を聴いてもらいアドバイスをもらったり、わからないことを確認したりする時間を設けた。その際、教師側からグループの設定は行わず、誰とでも自由に交流できるようにした。生徒は授業の中で、隣の友人にアドバイスをもらったり、交流しているところへ参加して3～4名でお互いの作品を聴きあったり、記譜の得意な仲間に楽譜を書いてもらったり、自分で考えて行動し、得たものを作品に生かそうとしていた。個人活動の時間を保証することで、生徒は自分の思いや意図を表現するために、よりよい方法を求めて試行錯誤する。この過程を経ることで、その後に設定するグループ活動がより効果的に働くと考えている。

自分の作品が完成したあとは、4人のグループをつくり、発表会を行った。これについては、意見交換しやすいよう教師側で人数や方法を設定し、一斉に行うこととした。お互いの作品を聴き合い、感想を述べ合うことで、さらに学習が深まり、豊かな表現活動につながっていくと考えている。

②教師が与える視点

「視点を変える」活動としてはほかに、教師が意図的に視点を与えることで、生徒にゆさぶりをかけることが挙げられる。「変奏」を行うには、さまざまな音楽的観点をつかい、自分の思いや意図に近づけるよう工夫していく。初めて変奏を行う生徒にとっては、何をどのようにつかえばよいのか検討もつかない場合が多い。そこで、教師が例として創作を実際に行い、段階的にいくつかの音楽的観点を提示していくこととした。教師の例示は、「何かが変わった」ことがすぐにわかるよう仕組み、生徒にゆさぶりをかけるように意識した。それを生徒に聴き取らせ、何が変わったのか、どう変わったのか考えさせることで、音楽的観点が効果的に働き、場面にあった旋律に変化していく様子を実感させた。生徒の感想には、「リズムや拍子が変わるだけで、こんなに曲の雰囲気が変わるのかと驚いた」「少しの変化で曲が大きく変わるのが面白い」

グループで聴きあう活動



聴取して、気づいたことを発表する



などの記述が見られた。授業では聴取活動のあと、提示した観点のうち、どれか一つ以上をつかって変奏するように指示した。これまでの音楽経験により、個人差の大きい創作分野においては、誰もが自分の力で活動ができることを目標としている。リズムを一カ所変える、速度を変化させる、和音を取り入れるなど、生徒がそれぞれ自分に合った観点を選択できるよう工夫した。これらの観点を段階的に提示し、授業を行うごとに少しずつ表現の幅を広げていくことで、「よりよい旋律をつくる」ことにつなげていくことができたと考える。

(3) 来年度に向けて

来年度は全体研究の3年目となり、「視点を変える」活動の有効性を明らかにすることが求められている。これまで行ってきた授業を改めて見直し、「視点を変える」活動が生徒にどのような影響を与えたのか、それは「深く考える」授業を行ううえで効果的だったのか検証する必要がある。そのために、どのような方策が考えられるのか、全体研究を受けて音楽科でも研究を進めていきたい。生徒の様子を詳しく知るためにも、ワークシートや映像・音声等での記録をさらに充実させるとともに、教師が活動中の生徒と多くコミュニケーションをとれるような工夫が必要ではないかと考えている。個人活動を増やすことで、生徒一人ひとりと関われる時間がさらに限られてしまうという課題点がある。全体と個人に教師がそれぞれどのような投げかけを行うのかによって、生徒の活動の様子も大きく変わるのではないだろうか。また、音楽科では生徒のもつ力の個人差が大きく、活動内容の進み方にも差が生まれている。今年度の授業でも、進度が遅れがちであったり、苦手意識が高かったりする生徒への支援方法が課題とされた。題材設定だけでなく、活動の方法を試行錯誤し、誰もが楽しんで音楽活動に取り組めるような授業を行っていきたい。さらに、昨年度からの課題である、創作以外の分野においての実践事例を増やしていきたいと考えている。

〈引用・参考文献〉

- ・ 中学校学習指導要領解説 音楽編 文部科学省
- ・ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校 音楽)
H23 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・ 山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要 H23～26
- ・ 「教えて考えさせる音楽の授業」 内田有一著 2014
- ・ これからの中学校音楽ここがポイント 山本文茂監修 2011